聖書と説教　　2024 年 6 月 2 日（日）聖霊降臨後第 2 主日

新約聖書 マルコによる福音書 2 章 23 節―3 章 6 節（新共同訳）

[23] ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら
麦の穂を摘み始めた。[24] ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、
彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。[25] イエスは言われ
た。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何を
したか、一度も読んだことがないのか。[26] アビアタルが大祭司であったとき、
ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを
食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」[27] そして更に言われた。
「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。[28]
だから、人の子は安息日の主でもある。」

[1] イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。[2] 人々
はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、
注目していた。[3] イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われ
た。[4] そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を
行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙って
いた。[5] そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみ
ながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どお
りになった。[6] ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒
に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「安息」

ユダヤ人にとって、安息日はきわめて重要なものでした。安息日はヘブライ語で「シャバット」と言い、「やめる、中断する」という言葉です。

安息日について、旧約聖書にこのように記されています。

「七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる」（申命記 5:14）

安息日には、イスラエルの民だけでなく、男女の奴隷や家畜、寄留する外国人も休まなければならないということです。

本人の自由意志が認められない奴隷や家畜にとって、安息日における「労働の禁止」は、過酷な労働から解放される恵みと充足の時だったのではないでしょうか。

元来、安息日とは、神の前に休息し、生きる姿を回復する、自由への定めでした。

イスラエルの民、すなわちユダヤ人が、安息日を厳守するようになるのは、イスラエルの国が紀元前 6 世紀に新バビロニア帝国によって滅ぼされ、土地、王、神殿のすべてを失う破局の体験をした後のことでした。バビロンに捕因されて亡国の民となるという破局の体験をしたユダヤ人たちにとっては、安息日の戒めを守ることが、割礼や食物規定と共に、ユダヤ人と異教徒を区別するしるしとなり、ユダヤ人としてのアイデンティティーを確立することだったのです。

それから 6 世紀後のイエスの時代にも、安息日において禁止されている事柄の内容を巡って、議論が続いていました。ファリサイ派の律法学者たちは、安息日にしてもよいこと、してはいけないこと、を細かく定めて拡大解釈をしていき、安息日に禁じられた行為が増えていきました。

たとえば律法学者たちは、結び目を作ることや、二文字以上の文字を書くことも、禁じられた労働のうちに入るのではないかと議論していたほどでした。

イエスの弟子たちが安息日に麦の穂を摘んだことは、そんな中で起きた出来事でした。

当時、他人の麦畑であっても、手で穂を摘んで食べることは許されていました（申命記 23:26）。貧しい人たちがそれを食べて空腹を満たすことができるようにとの配慮です。

ファリサイ派の人々は、イエスの弟子たちの振る舞いを非難しました。「麦の穂を摘むこと」は、収穫をすることであり、それは「安息日にしてはならないこと」だという言い分からです（出エジプト 34:21）。

それに対してイエスは、彼らと同じ水準で論じることを拒否します。イエスはこう言いました。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（マルコ 2:27）。

律法学者の律法解釈は、律法の根本精神を忘れて本末転倒し、人間生活を縛り規制するものとなっている、それがイエスの答えでした。

本来は、自由への戒めであったはずの安息日が、人が人を縛るものとなっている。イエスは、「だから、人の子は安息日の主でもある」と宣言します。かつてイエスは、中風の人を癒した際に「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」（マルコ 2:10）と言ったことがありました。罪を赦す権威を持っているイエス・キリストは、安息日に対しても人が縛っているものを解き放つ権威を持っているのだ、ということです。

この場面のあと、3 章 1 節はイエスが会堂に入ったところから始まります。会堂とは、礼拝をする場です。かつてイエスは会堂で、人にとりついた汚れた霊を追い出すという奇跡を行ったことがありました。

その後、先ほどの麦畑の出来事ののち、イエスは人々に福音を説くため安息日に再び会堂に入り、「片手の萎えた人」に出会います。安息日に認められていた医療行為は、命に危険がある場合のみでした。片手の不自由な人は、それに該当（がいとう）しません。この時、既に「安息日」の問題でイエスと対立していた律法学者やファリサイ派の人々は、イエスが安息日にしてはならないことをしていると訴えようとして、イエスがこの人を癒やすかどうか注視していました。

しかしそんな中、イエスはその手が萎えた人に呼びかけました。「真ん中に立ちなさい」。

イエスはあえて、その「手の萎えた人」を、人々の注目の集まる会堂の真ん中に立たせてこう問います。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」（マルコ 3:4）。

イエスが問いかけているのは、本来、安息日は人が救われる日ではないのか、ということです。週に一度、労働から解放され心身共に休息が与えられるために制定された安息日は、「命を尊び、慈しむ」ためのものではなかったか、とイエスは問います。

イエスの問いに、彼らは黙っていました。イエスは怒って人々を見回し、「彼らのかたくなな心」を悲しみました。

イエスを怒らせ悲しませたのは、彼らが人の苦しみに平気であったからだけではなく、律法の縛りや打算から人間を解放する新しい摂理に、彼らが心を閉ざしていることです。

イエスは、会堂の真ん中に立ったその人に言いました。「手を伸ばしなさい」。そこには、心を閉ざす人々の中で、イエスに心を開き、救いを求める人間がいました。彼が言われた通りに手を伸ばすと、手は元どおりになりました。

この時から、ファリサイ派の人々とヘロデ派の人々は、イエスを殺すために手を組みました。

これは、イエスの十字架への道筋が作られていった出来事でもありました。

安息日に、人を癒やす奇跡を公の会堂で行ったことは、イエス自身の命を賭けた行為でした。

生涯、イエスがご自身の命を賭けて説いたものは、人間の真実の自由と、真実の愛でした。

人類の歴史上、人間は、自分の運命、そして神に固執してきました。

自然の猛威や大災害を恐れ、神の怒りを鎮めるために、生きた人間を生贄として神に捧げるといった風習が行われていた古代文明もありました。

しかし、そのような行いは、神と人間との間に、真実の正しい関係を築いていたのでしょうか。

そこにあるものは神への深い恐れの念であり、神の怒りに触れないために他者を犠牲にしてでも助かりたいという自己防衛本能です。

そこには、太古の昔から人間の根源に存在する、深い恐れと不安が写し出されているのではないでしょうか。

そして、元来は人間を解放するための自由への戒めであったはずの安息日も、人目を気にし、神と人とを恐れながら守らねばならない、人が人を縛る規律となっていました。

人間が神を信仰するその根底には、「救われたい」という気持ちがあると思います。

イエスの前に立ち、イエスから癒やされた片手の不自由な人にも、「助かりたい」「救われたい」という思いがあったでしょう。

そこには、恐れや不安の念は全くない、ただ神を信頼する真っ直ぐな気持ちがあったのです。

そこでは、神と人間が喜びを持って真っ直ぐにつながる、神と人間との間の喜びにあふれた関係性が築かれていたのではないでしょうか。

イエスの前に立った「片手の萎えた人」は、私たちの姿も表しています。

あなたは、何を望み、どんな願いを持ってイエス・キリストの前に立ちますか。

心にそれを感じてみてください。

憐れみ深く慈愛に満ちた、主イエス・キリストの御名を通して祈りましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 申命記５章 12 節―15 節（新共同訳）

[12]安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。
[13]六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、[14]七日目は、あなたの神、主
の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘
も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留
する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じよう
に休むことができる。[15]あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あな
たの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起
こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられ
たのである。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二４章５節―12 節（新共同訳）

[5]わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリ
ストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕
える僕なのです。[6]「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心
の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくだ
さいました。
[7]ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並
外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明
らかになるために。[8]わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、
途方に暮れても失望せず、[9]虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼ
されない。[10]わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエス
の命がこの体に現れるために。[11]わたしたちは生きている間、絶えずイエスの
ために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。
[12]こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いて
ることになります。

教会讃美歌 184 番「きよき石よ」1,2,4 節、239 番「ひととなりたる」1,2,4 節、279 番「みことばもて」1,2,4 節、333 番「山べに向かいてわれ」1,2,4 節